実力向上講座（漢字仮名交じりの書）

【第十四回】調和と表現

山梨大学准教授　清水　文博

◇はじめに

今回はまず、表現の中でこれまで取り組んできた調和についての位置づけを確かめます。また、表現のなかで重要な位置を占める「意図」に着目し、調和を前提とした「意図に応じた表現」について考えます。

■表現の中の調和

これまで八回にわたり、「調和」をテーマとして取り組んできましたので、調和が漢字仮名交じりの書の表現の核になっていると思われることがあるかもしれません。しかし、調和のみにとらわれていては漢字仮名交じりの書が精彩を欠いてしまうかもしれません。以下では表現の中の調和について考えたいと思います。

さて、書にかぎらず何かを表現することは人の自然な欲求の一つだといわれます。私はその欲求の心の動きを解明することはできないと思いながらも、書を表現する際、伝えようとする思いや感興（かんきょう）（注1）等の何かが表現の中心にあると考えるのが分かりやすい整理方法だと思います。

表現者の思いや心の動きは、他者が規定しうるものではないのですが、たとえば文学や美術、音楽などの芸術作品に触れた感動が感興のもとになることはあり得るでしょう。書を学ぶ過程を考えると、臨書で得たものが感興等の何かになりうるということもあるはずです。心の動きや躍動の表現はこのようなところから生れると信じたいと思います。また、この考え方のほか、気や自然の働きが表現の源になっているという、多分に東洋的な整理の方法もあり得ます。

感興等を中心に据え、表現の構造を考えたときは、感興等を円あるいは球の中心に据え、中心から周りに広がるイメージで考えると構造が理解しやすいと思います。源泉が周辺に広がるということでもよいでしょう。感興等が広がる過程では、書の表現にあたっての構想の展開、古典の理解、技法の修練などさまざまな事項があり得ます。漢字と仮名の調和も、ここに位置づけられるでしょう。要するに、これまで取り組んできた調和は、漢字仮名交じりの書の表現の構造全体からみればいわば周辺事項であるということです。

繰り返しになりますが、ここでは表現者が感じている思い、あるいは書者本人にも理解できない可能性がある感興等の何かを漢字仮名交じりの書の制作の中心に据えたいと思います。私の場合は漢字仮名交じりの書を鑑賞するときも、作者の感興等の何かを中心に据えてよいと思いますが、それは規定できないものであり、他者

がそこに立ち入ることは難しいのではないかと思っています。一方、書を筆者からいったん切り離し、書き表された形象等を自律的なものとしてとらえて丁寧に読み解く（注2）ことは、私たちが自由に行ってよいはずです。漢字仮名交じりの書の鑑賞における分析的な鑑賞は丁寧に行われることが推進されるべきです。

（注1）書の作品制作の動因となる一種の精神活動のこと。

（注2）ここでは書の形象や筆の動きのリズム等をそれ自体のものとして「読む」ことを意図している。

■表現の意図

日常生活において手で書かなくなることが加速度的に進行している現在、書が社会生活のなかにどう位置づくかを考えるうえでは、いわゆる「意図に応じた表現」（注3）の考え方が大切になりましょう。「意図に応じた表現」とは、感興等の何かを中心に据えた場合、周辺事項に位置づくと思いますが、ある意味では調和以上に重要であるということです。

ここでいう「意図に応じた表現」とは、後で取り扱う語句の意味内容に応じた表現ということだけではなく、表現の形式や書いた人のねらいや、誰にどのように伝えようとしているかなど多様な内容を含みます。意図に応じた表現を広い視野から考え、漢字仮名交じりの書として表現することは少し高度な内容ですが、鑑賞するのは行いやすいと思います。

皆さんは今日行われている書道展の図録をお持ちでしょうか。漢字仮名交じりの書だけを掲載した図録はあまりないかもしれませんが、漢字の書や仮名の書、篆刻（てんこく）等を網羅した展覧会図録のなかに、漢字仮名交じりの書の作品も掲載されていることは多いと思います。手近にあればその図録をご準備ください。無ければインターネットの画像検索でも結構です。検索サイトでは「漢字仮名交じりの書」のほか「調和体」「近代詩文書」等で検索してください。【図1】はタブレット端末による検索と鑑賞の様子です。タブレット端末は拡大が容易ですから、拡大による分析的鑑賞が可能です。

【図1】図録やインターネットで意図に応じた表現を確かめる

図録やインターネットの画像による漢字仮名交じりの書の鑑賞では、意図に応じた表現がどのようになされているかを分析しましょう。ただし、注意する点は、解説があった場合、解説を先に読まないことです。左は分析視点の例です。

- なぜその語句を書き、その書きぶりにしたのか。
- 言葉の主張と表現は関連しているか。
- 誰に向けて書かれているのか。
- なぜその形式や紙の大きさで書いたのか。
- どのようにして読ませようとしているか（読みやすいか、逆に読めなくとも魅力があるか）。
- 改行や墨継ぎに意図はあるか。
- 書風に思いが意図されているのか。
- 何かの古典に基づいているか。
- 用具用材は意図と結びついているか。

画像検索では、必ずしも熟達者による作品のみを鑑賞することにならないかもしれません。しかしそのようにして多様な表現を見たほうが、

自分事として意図に応じた表現を考えやすいのではないかと思います。

さまざまな漢字仮名交じりの書について、どのような意図で書かれたかを考えることは、みなさんの意図に応じた表現を磨くことにつながります。ぜひ「意図に応じた表現」を探る鑑賞を行ってください。

（注3）意図に基づいた表現や、それに関連する指導事項は、高等学校芸術科書道の「学習指導要領」に位置づけられている。

■語句に応じた表現

意図に応じた表現として練習しやすいのは「語句に応じた表現」です。

すでに、「空山人を見ず」を半紙に書くことは第八回（令和五年十一月号）に行いました。ここでは、この素材を用いて「語句に応じた表現」に取り組みましょう。語句に応じた表現を考えるためには、言葉との出会いへの思い、言葉の理解が必要です。「空山人を見ず」は次に挙げる王維「鹿柴（ろくさい）」の一節です。

空山不見人　空山人を見ず
但聞人語響　但（た）だ人語の響きを聞く
返景入深林　返景深林に入り
復照青苔上　復（ま）た青苔の上を照らす

「空山人を見ず」は、最初の部分の書き下しです。山の中は静かで、人影は見あたらないという内容です。後半では夕日の照り返しが林に差し込み、苔を照らしている情景が記されています。前回は調和という観点でのみ書いたかもしれませんが、情景を意識した上で、この詩の内容との出会いを考えて書くのでは表現が変わってくるはずです。【図2】は静けさに焦点をあて、少し細めに、また余白を多くとって書いたものです。山や空などのイメージを膨らませて書くのもよいでしょう。しかし、漢詩の意味からいえば、山のエネルギーを爆発させるような書きぶりで山を書くということにはならないはずです。山のような象形を由来とする文字の場合は漢字の表意性を生かしやすいのですが、逆効果にならないようご注意ください。言葉の内容、伝えたい思いや相手、見られる（展示する）場所なども考えて、適切に表現したいものです。

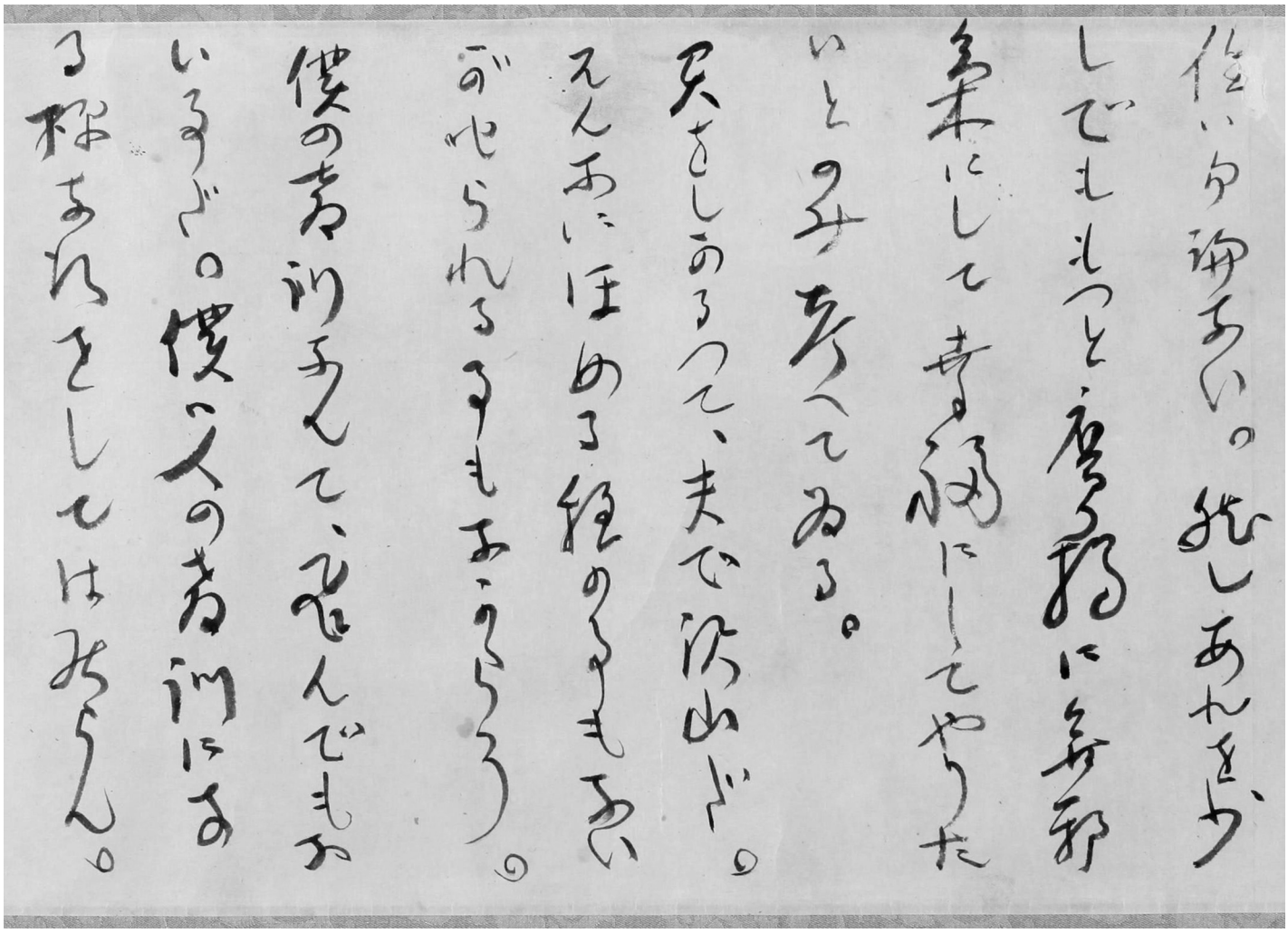
【図２】空山人を見ず

表現を語句内容と意図的に連関させるべきか否か、あるいはその程度をどうするべきかということはしばしば議論になりますが、今回の練習で行ったような連関は、ある程度意図的に行われてよいと思います。このような練習は表現の幅を広げたり表現を磨いたりする方法として取り入れるとよいでしょう。

私自身、鑑賞としては、書展のほか図録やインターネットで見る漢字仮名交じりの書を見たとき、特に作者自身が紡いだ言葉による作者の感動の率直な表現に共感することがあります。今回は鑑賞の方法も取り上げました。鑑賞と表現は車の両輪のように連関させながら実力の向上を図るとよいでしょう。

◇

最後に、漢字仮名交じりの書を鑑賞しましょう。【図3】は夏目漱石（なつめそうせき）が弟子の鈴木三重吉（すずきみえきち）に送った書簡の一部を拡大したものです。三重吉は後に児童雑誌『赤い鳥』を創刊し、児童文学



【図３】夏目漱石書簡（部分）

（関西大学デジタルアーカイブより転載）

者として活躍した人物です。

漱石は古くから書に関心を寄せ、良寛（りょうかん）らに傾倒した作品を残しています。漱石の書簡は多く遺されており、書風に幅があります。これは時期や執筆の状況等による違いということだけではなく、漱石が書に高い関心を持っていたことが関係しているのではないかと思います。本書簡からは毛筆が確実に実用として機能していた時の筆のリズムを読み取ることができます。この手紙はおそらく速筆だと思います。内容を読み、漱石がどのような心の動きを働かせて運筆したのかを確かめながら、連綿の少ない明快な筆使いを鑑賞しましょう。

（僕が森田をあんなにした責）
任は勿論（ハ）ない（奈）。然（しか）しあれを少
しでももっと鷹揚（おうよう）に無邪
気にして幸福にしてやりた
いとのみ考へてゐる。
君をしかる（可）つて、夫で沢山だ（多）。
そんな（奈）にほめる程の事もない（奈）
が（可）叱られる事もなか（奈）ら（可）う。
僕の教訓なんて（奈）、飛んでもな（奈）
い事だ（多）。僕は（ハ）人の教訓にな（奈）
る様な行をしては居らん。……